

# 人間という生き物

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 柳沢 直

## ●人間という「生き物」

この原稿を執筆している十二月には、国連の気候変動枠組条約第21回締約国会議がパリで開催されています。二十一世紀は環境の世紀と言われるすが、地球温暖化や生物多様性の喪失などグローバルな問題は、多大な努力の一方で、残念ながら解決の方向に向かっているように思えません。その理由を理解するには「人間がどのような生き物か」という問いが必要であると思えます。

人間が生物であることについては疑いの余地はありません。しかし、人間は他の生物と違って特別な存在かと問うたときには答えは単純ではありません。

人間も他の動物同様食料として他の生物を必要とし、生存のために限られた環境を必要とするため、特別な存在で無いとも言えますし、化石燃料や原子力を手にして、太陽エネルギーを基

本としてまわってきた地球の生態系の縛りから外れてしまっているので特別な存在である、とも言えます。

つまるところ、人間は「地球という限られた世界で暮らしていることを忘れてしまった生物」と言えるでしょう。

## ●環境収容力

生態学には「環境収容力」という概念があります。ある環境に収容できる生物量には上限があるという考えです。環境収容力に近づいて個体が増え続けると、様々な要因で死亡率が増え、個体の増加にブレーキがかかります。人間という生物の環境収容力に関しては様々に見積もられていますが、食料の増産や抗生物質の発明など、死亡率の増える要因を抑え込むことによつて、世界の人口はまだ増え続け、限られた資源を食いつぶして環境に負荷をかけて続いています。

## ●日本人の自然のつきあい方

日本人は里山林を利用するときにはその資源量を経験的に把握し、資源を使い尽くさないよう年間の生長量以内の伐採にとどめていました。そのためルールが地域ごとに定められていたのです。他にもゼンマイを収穫するときには株のうちいくらかを加減して残すことや、焼き畑で火入れをして何年か収穫したのち休ませるなど、数多くのルールが先人からの伝統知として受け継がれてきました。

## ●グローバリズムの意味

昔の人が「環境収容力」という概念を意識していたかどうかはともかく、目に見える範囲で自然の恵みを享受できていた時代（といってもつい五十年くらい前のことですが）には、自然の劣化は目に見えてわかりやすかった筈です。取り過ぎたら採集を控える、収穫が落ちたら土地を休ませる、といっ

た行為はごく自然であったことでしよう。

一方で現代のように外国など遠い自然から資源を得ている場合には、効率良くものを生産できるメリットはありますが、自然の劣化や収奪についてはもはや実感することはありません。経済原則のみで過収奪してもブレーキがかからないのです。

人間以外の生物の場合、食物網（複雑な食う食われるの関係）に組み込まれているため、大発生しても天敵が増加するなど、それを抑える仕組みが働きますが、人間の場合は自らブレーキをかける以外に方法がないとも言えます。

## ●持続可能社会

人間も他の生物と一緒に限られた資源を利用して暮らしています。この当たり前のことを自覚することが持続可能社会への第一歩だと思います。そのためにも、古くからの日本人の自然のつきあい方を、今一度学び直す必要があるように思えてなりません。



▲ワラビの収穫も森林の伐採も根本は同じ